

第11回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

- ◇実施日時 2025年2月4日(火) 19時~21時
- ◇方法 ZOOMによるオンライン開催
- ◇参加者数 32名
- ◇内容 学習指導案の検討(1名)、カリキュラムマネジメント案の検討(1名)
「ユネスコ新教育勧告」について

1) 島田望季さん(社会科教育専修3回生) 学習指導案検討

中学校2年 総合的な学習の時間「生野区の空き家を減らそう」

大阪市生野区は、市内でも最も空き家の多い区のひとつ

下町情緒あふれる地域 道が狭く長屋が多い 建て替えが困難な状況

生徒にとっては空き家が当たり前の風景になっている

- ①生野区の空き家の現状を知る 空き家を与える影響を考える
- ②空き家を減らすための取組について調べる 区役所の人に聞く
- ③空き家の活用方法を考える
- ④考えた活用方法をプレゼンする

意見交流から

- 「下町のよさ」とは何? 子どもの予想をしっかりと想定しておく必要がある
→ 細い道の両側に木造の長屋が多く、そこに住む昔ながらの人の息遣いが感じられる。
コリアタウンもあり国際色豊かな地域だが、シングルマザーや高齢者も多い。
- 「空き家活用からまちづくり」と考えたときに、区役所のどの部署の人から、どんな話をしてもらおうか、それによっても方向性が変わってくる。指導者側の意図をしっかりと持つておくことが大事。
それによっては、区役所でなくても、自治会長なんかでもいいはず。
- 空き家を探究する課題として自分事にする導入は?
→ 通学路の写真を見せる予定だが、自分でも弱さを感じている。
- 最後にプレゼンするのは、活用方法を考えたことだけを発信するのか?
→ 地域の人や区役所の人を想定しているが、考えた活用方法をどう捉えてもらえるか。
- 行動変容を促す取り組みにするためには、自分事化させるところがポイントになる。そういう展開にすることが必要ではないか。「自分たちには何ができるか」を考えさせたい。
- 中学生でもできることはあるはず。「自分たちだったらどう活用するか」を提案させたい。

2) 高橋百合香先生(屋久島町立小瀬田小学校) カリキュラムマネジメント案の検討

小学校6年 外国語科「We live together ~私たちは一緒に暮らしている~」

「We are all connected」(僕らはみんなつながっている)の歌 動物や住処を表す単語
いろいろな動物について英語で紹介する

屋久島の絶滅危惧種の動物について知る(中学年ですすでに学習) 動物の気持ちを考える

外国人ALTにそれぞれの国での取組や課題について話を聞く

「自分が動物だったら~」(I ~)文章を考え、ポスターにする

学校間交流 外国人観光客に伝える活動

担任の先生に協力してもらって、総合的な学習の時間で調べたりポスターをつくったり

3学期には、道徳「地球があぶない」、理科「地球に生きる」に関連

意見交流から

○屋久島だけでなく、全国どこでも活用できる普遍性のある実践であると思う。

○ALTの先生の活用など、身近な人に話を聞くことで子どもが意欲的になったと思う。

○英文を考えるのも注意喚起になりがちだが、ウミガメを育てた経験があるからか、「I love」から始まっているように子どもの愛着が感じられていいと思う。

○環境面を考えると同時に、国際交流という面も大事にしたい。鹿児島本土に住む外国人に対してアピールすることもよいのでは。

3) 「ユネスコ新教育勧告」について (河野晋也先生：大分大学)

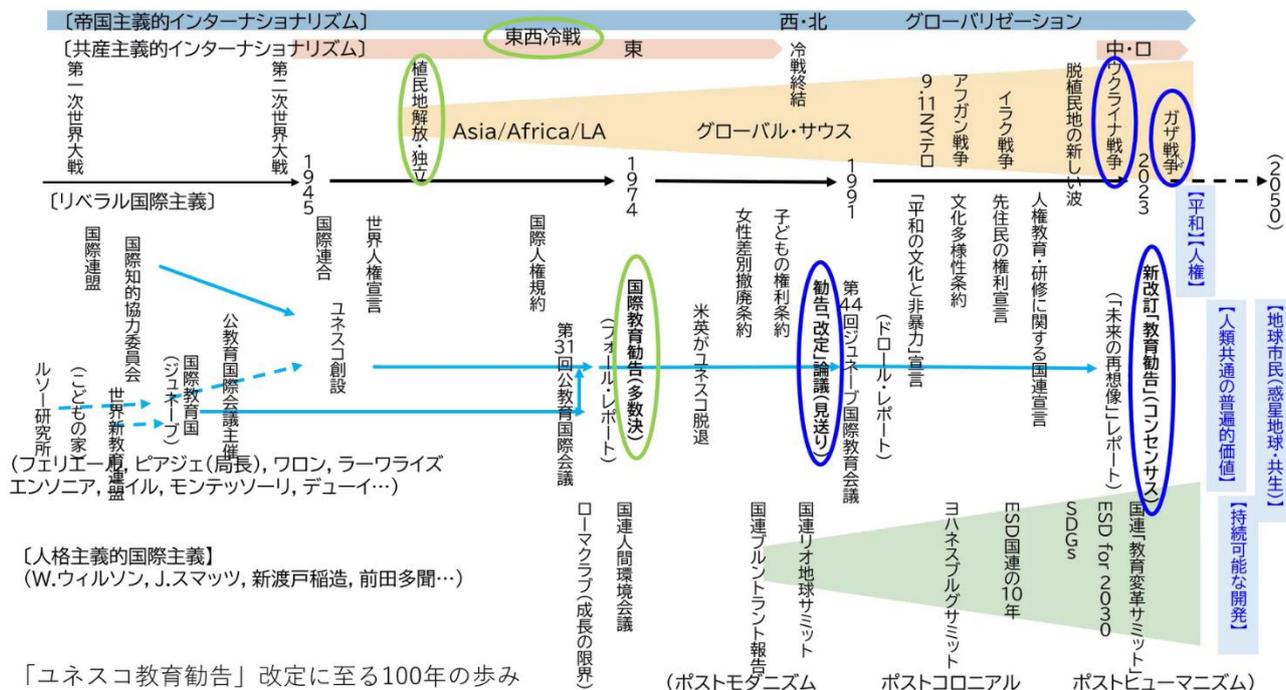
「平和と人権、国際理解、協力、基本的自由、グローバル・シチズンシップ及び持続可能な開発のための教育に関する勧告」(2023年11月20日 第42回ユネスコ総会採択)

194か国のコンセンサス

国際教育勧告(1974年)との比較から

国際理解、国際協力、国際平和、人権及び基本的自由の尊重を増進し、国際憲章、ユネスコ憲章、世界人権宣言等で掲げられた目的を、教育を通じて達成することを目的。

- ・教育政策の主導原則が7点+α (改訂版は14原則)
- ・多数決で採択されている
- ・東西冷戦(核戦争の危機)、アジア・アフリカでの植民地解放などの国際環境



吉田敦彦 (2023:25) 図1: ユネスコ教育勧告の歴史的背景

- ・環境問題のクローズアップ
- ・各地での紛争、戦争の増加

今回の採択の経緯

- ・14の指導原則を通じて、持続的な平和をもたらし、人間開発を促進するために教育をどのように活用すべきかを示した 唯一の世界的な基準設定文書。
- ・人間以外の生命に対して世界中の国々が尊重することを求めた希少な合意文書。

①世界の共通課題 現代社会特有の地球規模の課題への対応

②国境を超えた「定義」の共有

③「目的」

④着目すべき概念

- ・地球/惑星の限界（プラネタリー・バウンダリー）

他の生命と自然そのもののニーズや権利を尊重することが世界共通の目標

- ・共生

普遍的概念＝「共生」「調和」「いたわり」「分かち合い」といった概念を強調

普遍的価値と文化多様性とのよりよいバランスを見出す必要性

- ・「人格の全体性」と「変容」

「知識獲得の学び」から「知識創造の学び」へ

知っている者が知らない者へ一方的に教えるという一斉授業のスタイルからの脱却

14の主導原則と12の学習成果を見て、日本の教育、自分の授業を見直してみるとよいのでは。

意見交流から

- 日本の教育の課題も強みも明らかにできる。
- 学級経営にも生かせる部分が多い。
- ESDの推進はまさにここにあってはまる。
- 人間の尊厳、多様性の尊重を重視していると受け取れる。
- 教育は「当たり前だと思っけていても変わっていくもの」。教師も学び続けないと。
- 時間に追われて教師主導になる授業のときもある。
- こういうことが現場に下りてこない。何か一つでも小さなことでも誰もが取り組んでいくべき。
- 人間が自然のことを考えていないのはその通り。授業で具現化するの・・・。
- まずは原文を自分で読んでみよう。読めば見えてくるもの、考えられるものもある。
- ESDを学んでいる我々は、このトップランナーでありたい。